

日本ダルクローズ音楽教育学会
第36回研究例会 発表要旨

◆研究発表

・発表1.「ダルクローズ・ソルフェージュとペスタロッチ主義音楽教育」

関口 博子（長野県短期大学）

ジャック＝ダルクローズ (Dalcroze, E. J., 1865-1950) の母親が、ペスタロッチ主義の音楽教師であったことは周知の通りである。したがって彼がペスタロッチ主義の影響を潜在的に受けた可能性は、容易に推察できるであろう。ペスタロッチ主義による唱歌教育の方法は、19世紀前半のスイスにおいて、プファイファ (Pfeiffer, M. T., 1711-1849) とネーゲリー (Nägeli, H. G., 1773-1836) による『ペスタロッチの原理による唱歌教育論』 (Gesangbildungslehre nach Pestlozzischen Grundsätzen, 1810) — 以下、『唱歌教育論』と略称 — によって完成し、それが各国に多大な影響を及ぼしたのである。だが、ジャック＝ダルクローズのメソッドとペスタロッチ主義との関係についての具体的な比較検討は、これまでほとんどなされてこなかった。もちろん、ジャック＝ダルクローズとペスタロッチやネーゲリらとは、年代的に100年近い相違があるため、両者の方法には大きな隔たりもあるであろう。

本発表では、ジャック＝ダルクローズとペスタロッチ主義との関連性を浮き彫りにする一つの試みとして、『ダルクローズ・ソルフェージュ (全3巻)』 (板野平/岡本仁訳、国立音楽大学出版部) とプファイファ/ネーゲリの『唱歌教育論』との具体的な比較検討を行い、両者の共通点と相違点を明かにすることを課題とする。その際にはまず、ジャック＝ダルクローズのメソッドの全体的な体系とペスタロッチ主義との関係を踏まえる必要があるであろう。『ダルクローズ・ソルフェージュ』と『唱歌教育論』との具体的な比較検討では、音階や調性の提示の仕方や練習方法に焦点をあて、それを支える両者の理念についても考察したい。

・発表2.「小学校低学年の音楽授業における身体表現の試み」

伊藤 仁美（東京教育専門学校・立教女学院小学校）

一般的な傾向として、小学校低学年は子どもたち自らが感じるままに身体を使って音楽表現を楽しもうとする意欲が旺盛であるが、筆者が教鞭をとる小学校でもまさしくこの通りである。そこで筆者は子どもたちの特性を捉えた上で音楽に興味や関心を持つと共に音楽の美しさ、楽しさに触れることをねらいとした身体表現を用いた研究授業を行った。

本発表では、小学校第2学年の研究授業（ビデオ映像資料）から、当学年におけるリトミック的身体表現活動の可能性を探っていきたい。

・発表3.「リトミック教育への教材化に向けてー日本のわらべうたと太鼓のリズムー」

長尾 満里（越谷保育専門学校）

2000年11月26日に行われた本学会・第33回研究例会の口頭発表で私は「日本のリズムから始めよう」と提言した。そこで次に問題となるのは「何を」用いて「どのように」ということであるが、それには「日本の音楽文化に根ざした音やリズム」また、「日本の身体文化に根ざした身体の動き」であること。即ち、古くから日本にある民俗芸能などを基にリトミック指導への教材化を図ることが望ましく、その例として日本の「民謡、盆踊り、わらべうた」を挙げた。

本発表では、「わらべうた」のリズムに注目し、また、私はかつて日本の太鼓のリズムについて研究してその「基本パターン」を抽出したが、それとの共通性はあるのか？、などを調べ、今後のリトミック指導への教材づくりに向けて、それに用い得る「日本のリズム」を明かにしたい。

〈内容〉・わらべうたのリズム（楽曲／歌詞／遊び方を含む）の紹介

- ・日本の太鼓のリズム「基本パターン」の紹介
- ・「わらべうたのリズム」と「太鼓のリズム」の比較と結果
- ・日本のリズムの二様式＝小泉文夫氏の研究に学ぶ

〈考察〉リトミック教育への教材化に向けてー「リズムの静と動」と「身体の動き」ー